富士見市立東中学校

5月号

東中だより 東風（こち）

『夢や希望をはぐくみ、一人一人が輝く学校』を目指して

巻頭言

校　長　　菅野　誠一

柱のきずに気づくと

「立夏」へと移ろいゆき、菜の花畑の美景が遠ざかり、夏海の勝景が近づく時節となります。春の黄色と夏の青色を絵の具のように混ぜ合わせてできた初夏の緑色は、新茶の色彩も放ちます。かまぼこ型をした茶畑から「新年度の生活もそろそろ“板につく”頃ですね。」と、茶葉が“言葉”となってささやきます。「♪夏も近づく 八十八夜♬」と鼻歌交じりで茶摘みのように『茶』の漢字の「草冠」を摘み取ると、残りが『八十八』の縦文字に見え出し、目が泳ぎます。見上げると、屋根より高い鯉のぼりが、甍（いらか）の波と雲の波をおもしろそうに泳いでいます。「マスクなしで豪快に口を開けられていいね。」と声をかけると、鯉のぼりが口をパクパクさせて答えます。「時には自由に広い空を泳ぎ回りたいです。一度でいいから池を泳いでみたいです。でも、飾ってもらっている時間を大事にし、この場で泳ぎ続けます。」ポールに固定され、端午の節句の頃の限られた日々を、風を養分として強く泳ぐ鯉のぼりの風貌に、風格が漂います。

五月になると、童謡『背くらべ』も聞こえてきます。「♫柱のきずは おとどしの 五月五日の 背くらべ♪」この「柱のきず」の歌詞の響きに、アメリカ初代大統領ワシントンの子供時代の話が連想されます。いたずら好きのワシントンを父親が「今後、悪い事をしたら、家の柱にその数だけ釘を打ち込む。その代わり、良い事をしたら、その数だけ釘を抜いていく。」と告げました。その後もいたずらを続けたワシントンは、釘だらけの柱を見て考え直し、善行を積むようになりました。父親はその度に釘を抜き、最後の釘を抜いた時に言いました。「柱の釘は一本もなくなったけど、釘穴は残ったままだ。」その言葉にワシントンは、釘を抜けばいいのではなく、釘を打ってはならないと悟ったと言います。ふと、人の心が柱と重なり、思いが及びます。いじめ等の“太い釘”を心に打たれてあいた“深い釘穴”は、謝罪で“釘が抜かれた”後も消えることはないと…。そして、互いの心に“釘”も“金槌”も“釘抜き”も使わないことを願う中、自分の心の“柱のきず”に誰もが気づきます。心の伸びを刻んだ「心くらべ」の横線のきずに…。

大人になるほど 背比べより 背中比べ　どれだけ背中で語るか 肩書きより 背中書き